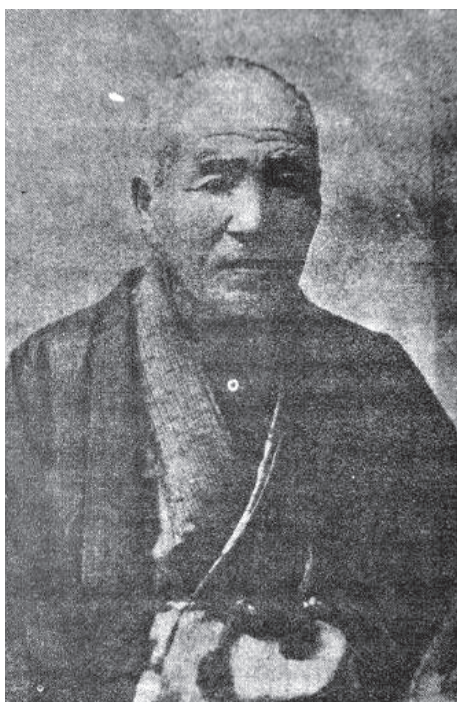


海後磋磯之介、明治に死す（下）

幕末の志士、海後磋磯之介の臨終に際して、宮内省の実力者・香川敬三皇后宮大夫（現常陸大宮市下伊勢畑出身）に届けられた海後宗親（磋磯之介）の履歴書には、桜田事件後、大坂の高橋多一郎とともに拳兵しようとしたが、幕府の詮索が厳しいため西上できず、越後に潜行した。元治元年（1864）の天狗党の乱では「海野剛蔵」と名を変えて水戸に舞い戻り、武田耕雲斎らについて那珂湊合戦を戦うも敗れ、同年10月25日に関宿藩に預けられた。明治元年（1868）2月に許されて水戸に戻り、同22年（1889）に「菊池氏」を名乗り、36年5月（正確には死去前日の16日）に「海後」に復籍した、とあります（明治36年5月17日付、香川敬三宛高橋諸随書翰、「香川家文書」3181、学習院大学蔵）。

死の前日に、念願の「海後」姓に復した磋磯之介。墓表の撰文も担当した高橋諸随（多一郎の養子、金子孫二郎の子）の香川宛書翰には、磋磯之介は「折々卒倒ノ如キ持病」（癩癩か）があり、5月15日の朝、炬燵にあたっていた際にその持病が起きた、足が火の中に入れてしまい、高熱を発して人事不省の状態におちいった、あと数日ももたないだろう、とあります（5月16日付、「香川家文書」3183）。

高橋は、磋磯之介へ最後の名誉を、と生前の叙位を



▲海後宗親肖像（72歳、『海後磋磯之介宗親遺録』所収）



石井 裕 氏
近現代史部会専門調査員
茨城県立歴史館主任研究員

香川に歎願しましたが、その願いはわずか2日後の18日に「従六位」の宣下という形で実現します。報道等では、磋磯之介は18日午後4時に「脳病」で死去した（『東京朝日新聞』5月20日付）となっていますが、これは叙位後に死去日時をあわせたものでしょう。当時の旧藩士たちの同郷人への思いの強さ、そして政府による同志の顕彰を実現することで、自分たち（旧水戸藩）の足跡を歴史の中に刻もうとする、彼らの心性がよくわかるエピソードです。



▲海後宗親墓碑（水戸市・常磐共有墓地）

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)